新潟市議会中国訪問団視察報告

○　日程　　平成２８年１０月１８日（火）～２１日（金）

≪行程≫　１０月１８日　　新潟空港発（仁川空港経由）青島空港着
　　青島農業大学視察
　　１０月１９日　　万里江茶公司（お茶工場）視察
　　在青島日本国総領事館表敬訪問
　　青島市人民代表大会常務委員会表敬
　　招宴
　　１０月２０日　　青島空港発
　　延吉空港着
　　日系企業視察
　　延辺朝鮮族自治州人民代表大会常務委員会表敬（招宴）
　　１０月２１日　　延吉市内（延辺博物館）視察
　　延吉空港発（仁川空港経由）新潟空港着

○　訪問団員　　団　長　　高橋　三義　（新潟市議会議長）
　　副団長　　栗原　学　　（新潟市議会議員）
　　団　員　　佐藤　耕一　（　　〃　　）
　　田村　要介　（　　〃　　）
　　内山　航　　（　　〃　　）
　　南　まゆみ　（　　〃　　）
　　石附　幸子　（　　〃　　）
　　松下　和子　（　　〃　　）

　　随　員　　高橋　哲哉　（新潟市議会事務局総務課長）
　　随員・通訳　関本　健　　（新潟市観光・国際交流部国際課主幹）
　　随　員　　神田　剛　　（新潟市北京事務所長・現地合流）

新潟市議会と、中国・延辺朝鮮族自治州人民代表大会常務委員会とは 2008 年に、青島市人民代表大会常務委員会とは 2009 年に、それぞれ「友好交流に関する覚書」を交わし、これまで相互理解を深めるとともに協力関係の構築に努めてきた。

昨年 9 月、新潟市で開催した「第 6 回北東アジア地区地方議会議長フォーラム」の際には両市の人民代表大会代表団が新潟市を来訪されており、今後の交流と友好関係の更なる発展に寄与することを目的に、両市を訪問した。

平成 28 年 10 月 18 日（火）

◎青島農業大学視察

青島空港到着時に出迎えていただいた青島市人民代表大会常務委員会の王岐氏、青島市人民政府外事弁公室の劉志勇氏に、青島市滞在中の案内役を務めていただいた。

農業大学視察については、中国訪問にあたり当方からリクエストを行ったものである。

飛行機の遅延、現地の渋滞により当初予定に対し約 1 時間遅延での到着となったが、下写真のとおり、快く迎えていただき、歓待を受けた。残念ながら視察時間は大幅に短縮されたが、予定されていた教授との懇談、大学資料館の見学という行程をこなすことができた。大学正門付近の講堂を開放いただき、意見交換を行った。

青島市農業大学出席者は以下のとおり

李中氏、隋妹妍氏、穸小勇氏、劉洪氏　他

会談は約 30 分、まずは王岐氏から大学の説明をいただいた。

◇青島農業大学について、

約 2 万 9 千人を超える全日制の大学校であり、農学の他、工・理・経・管・法・文・芸等が調和した多科性大学である。キャンパスは訪問した青島の他、莱陽と膠州現代農業科学技術モデル園をもち、校舎建築面積は約 79 万ヘクタールという広大な広さを誇る。現在教師は 1,506 人。うち博士は 574 人、修士は 761 人とのこと。新潟大学の生徒数が約 1 万人ということから考えても、その規模の大きさが伺える。（東京農業大学の全生徒数は 1 万 2 千人強。新大農学部は 700 人程度）

特筆すべきは、国際協力を絶えず強化していることで、アメリカカーネル大学、韓国ソウル大学、オランダヴァーヘニンゲン大学など 20 カ国と地域の 80 校の高校、科学研究機構と学術交流を築いていること。日本の大学も長野大学など、講師の交流、学術交流を行っている。（新潟大学との交流もあるとのことだったが、確認取れず）

＊写真は資料館の模型を撮影したもの

◇中国の農業事情について

中国の農業について、コメ、とうもろこし、小麦は世界有数の生産国だが、生産の殆どを国内で消費しており、輸出余力は高くない。大豆は近年の急激な需要増加を背景に輸入が大幅に増加している。改革開放後も食糧の増産政策を続けてきたが、96 年以降は豊作と不作を繰り返すなど食糧の過剰と不足に揺れ動いた。本格的な農業政策の強化を始めた 04 年以降、食糧増産を続けている。

農家の経営耕地面積は小規模で、優良な耕地は沿岸部に多く、当該地域の急激な開発に伴う耕地面積の減少は農業の将来にとって懸念材料となっているとのこと。

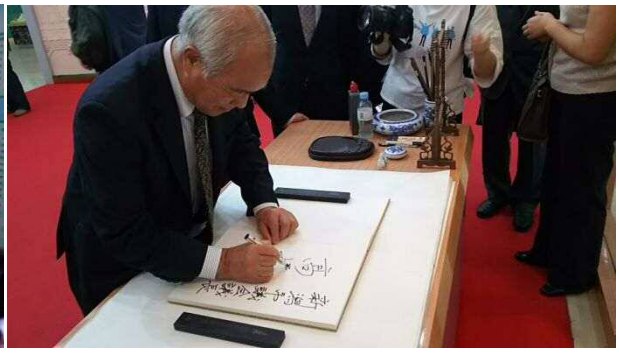
高橋議長より本市の農業型政令都市についての説明と本市農産品の紹介を行い、地元大学との連携や農業技術だけではなく、例えば環境問題についての交流などの可能性について意見交換を行った。

◇農業大学視察を終えて

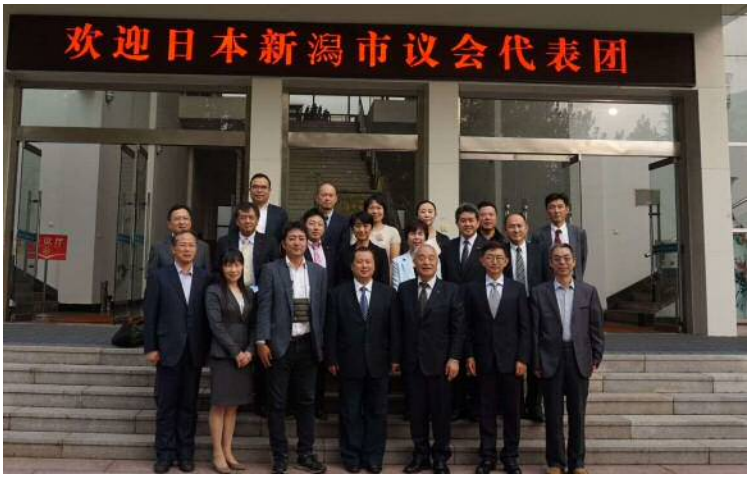
中国は「三農問題」を抱えていると言われているが、その問題の核心は、農業と工業との格差、農村と都市との格差、農民と市民との生活格差である。残念ながら青島市の行程中、バスの中から「農地」を探してみたが、都市部に関してはほとんどその「農地」が存在しない。それほど都市近郊は既に「都市化」しているのである。（唯一農地らしい農地を見学したのは、2 日目の「お茶畑」であったが、農業技術が進歩しているとはいえない状況である。）

中国の農業の将来を考えると、間違いないのは「消費者の規模が莫大なこと」「農業発展の余力が大変に大きいこと」である。中国の農業は未だ大きく発展途上なのだろうと容易に推測ができたが、同時に、中国農業発展の可能性は最も計り知れない部分なのかもしれないということを感じた。

中国国内においても富裕層、中間層が増大し、また、環境（農薬等）に対する関心が高まるなか、例えば「食の安心・安全」のニーズにどう対処するのか。今の中国農業の実情を考えると、やはり農業技術の発展・改善の可能性は「あり」だと思う。そういう意味で、高橋議長が提案した大学間の技術交流、人材交流、そして農産品の輸出入など本市と青島市の関係の進展は中国農業の発展を期待させるものであり、農業の可能性を肌で感じる視察となった。



その後、大学の資料館を訪れ、「青島農業大学」の歴史、資料を見学させていただき、大学を後にした。



平成 28 年 10 月 19 日

◎青島万里江茶業有限公司（お茶工場）視察

◇概要

青島万里江茶業有限公司は嶗山区にある中国北方の茶葉生産工場であり、青島政府が評定した青島市農産品加工のリーダー企業である。また、省レベルの「契約を守り、信用を重んじる企業」「農産品加工のリーダー企業」となっている。

栽培加工、化学研究育成、旅游観光が一体となった大型の現代的お茶の生産所である。

北緯 36°青島北限の茶所として、環境にやさしいお茶の栽培に取り組んでいる。

ISO9001 国際品質マネジメントシステム認証、無公害食品認証、AA 級緑色食品認証、有機食品認証を相次いで取得。同時に、北方の茶葉の中で率先して HACCP システムの導入を図っている。

また、品種は 20 種類以上におよび、ウーロン茶の北方での栽培を成功させた企業でもある。現在、茶畑の面積は 1,000 ムー（1 ムーは 1/15 ヘクタール）、年間加工能力は 100 トン、職員は 300 人を超える。

◇所感

新潟でいえば北限の茶どころとして村上茶が有名であるが、そこは中国、規模が違う。広大な茶畑とともに、工場、お茶に関する展示場、また、試飲および購入と観光スポットとなっている。

また、ウーロン茶が一番飲まれていると思っていたが、緑茶・紅茶が主流ということで、茶葉を入れたマイボトルを持ち歩き、いつでもどこでもお湯がもらえ日本人以上にお茶を飲んでいるように思う。新潟においてもマイボトルの活用をもっと促し、エコ活動に貢献できればと考える。

中国の食品というと安全性が問題視されるが、ここ万里江では食品の製造工程における品質管理システム HACCP を導入し、徹底した管理の下でお茶の生産・加工を行な

うなど食の安全にも力をいれ、これが市場の拡大につながっていると感じた。
　お茶に限らずこのような企業が増えることを願う。

◎在青島日本国総領事館　表敬訪問
　総領事館を訪問し、遠山総領事より、青島市の概況や我が国との関係等について説明を受けた。

◇概要
　青島市は、中国の副省級都市（国民経済・社会発展計画において、省政府と同様の権限を有する。）で、6 市区と 4 県級市からなる市の面積は 11,300 ㎢、人口は約 910 万人である。
　2015 年の青島市のＧＤＰは約 1,400.6 億米ドル、これは副省級都市の中で第 7 位、計画単列市（一級行政区ではないが、一級行政区と同様の経済管理権限を有する。）の中では第２位である。
　貿易総額は、約 656.8 億米ドルであり、これは山東省の貿易総額の約３割を占める。主な輸出入品目としては、機械電子が最も多く、他には農産品、繊維・アパレル、ハイテク製品であり、主な貿易相手国は米国、ＥＵ、韓国、日本となっている。
　日本との関係については、2015 年 10 月現在の在留邦人数が 1,497 人で、3 年前と比較すると約半分に減少している。日系企業数は 1,249 社となっており、これも大きく減少している。
　華北最大の港である青島港は、コンテナ取扱量は 1,754 万ＴＥＵ（2015 年、前年比 5.79％増、世界 7 位）、貨物取扱量は 4.3 トンで世界 8 位となっている。2015 年 5 月には、青島クルーズ船母港が開港し、日本は韓国等へのクルーズ船が運行されている。
　近年、中国政府は「サプライサイド（供給側）構造改革」の強化に力を入れることを指示しているが、青島市においても 2016 年 7 月に、「サプライサイド構造改革を深く推進することに関する意見」として、供給の効率化や良好な金融環境の構築、企業負担の軽減などの具体的措置を示し、イノベーション、サービス、海洋を特色とする新型経済構造の構築に取り組んでいる。

◎青島市人民代表大会常務委員会表敬訪問

新潟市議会と「交流に関する覚書」を交わしている青島市人民代表大会常務委員会を訪問した。あいにく、王文華主任（議長）は不在であり、副議長にあたる呉淑玲副主任と、李従国氏、鮑洪義氏、王岐氏、高群氏が同席のもとで、懇談させていただいた。

高橋議長からは、2015 年 9 月に新潟市で開催した北東アジア地区地方議会議長フォーラムに、青島市人大代表団から参加していただいたことについて感謝の言葉を伝えるとともに、両市が共に 2015 年の東アジア文化都市として実施した交流事業を通じて、一層深まった友好関係を今後の相互発展に結びつけたいと考えていることを申し述べ、篠田市長から預かった青島市人民政府の市長あての親書を手渡した。

平成 28 年 10 月 20 日（木）

３日目、吉林省にある延辺朝鮮族自治州に移動し、延吉空港では、延辺朝鮮族自治州人民代表大会常務委員会の姜三童氏、賈立新氏の出迎えを受けた。

延吉市の開発区にある日系企業を視察には、両氏並びに延吉市人民代表大会常務委員会の李根剛副主任からご案内をいただき、今後、これまでの友好関係を経済交流に発展させていければ、と意見を交わした。

◎延辺朝鮮族自治州とは

延辺朝鮮族自治州（えんぺんちょうせんぞくじちしゅう）は、中華人民共和国吉林省に位置する朝鮮族の自治州。州人民政府所在地は延吉市。現在、全人口のうち漢族が過半数以上の 59%を占め、朝鮮族の割合は 39%に低下している。様々な場所で漢字とハングルが併用されている。

自治州の西南部に白頭山が聳え、この山から流れ出る豆満江を境にして朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）咸鏡北道と接し、東部はロシアの沿海地方、北部は黒竜江省牡丹江市と接する。西部は同じ吉林省の吉林市と通化市である。

白頭山は満州族にとっても朝鮮民族にとっても聖なる山とされている。全体に山がちの地形で、豆満江流域にわずかに平地が開けている。

◎延吉市開発区（日系企業：秀愛食品、北本電気）視察

秀愛食品

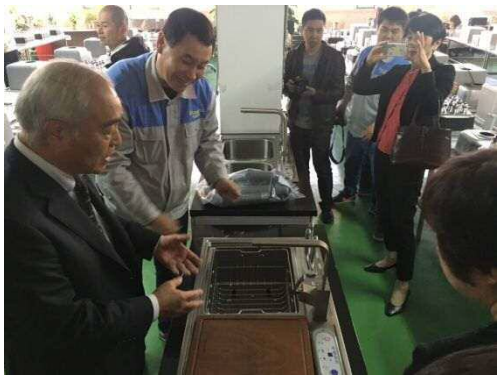
延辺地区では紅松（五葉松）が分布し良質で大粒の松の実が収穫されている。延辺出身の

職員が他から買い付けるのではなく地元の紅松からとれる実を活用しようということで製品化したと聞き、地域にある良質の資源を製品化し発展させたところが素晴らしいと思った。

日本の設備、技術、人材を積極的に投入し、ISO、BRC などの認証を取得し確かな品質を保証しており、地元の女性たちが勤勉に質の高い仕事をこなしている。

従業員を 250 名採用していて、すべて現地の方である。そのほとんどが女性で、通っている範囲も延吉の方がほとんどという事であった。給与としては 2,000 元～2,500 元程度であり、これは日本円に直すと 3 万～4 万円程度となる。これは周辺の製造業から考えると決して低い金額ではないが延吉市内ではもっと待遇がいいところがあり、2,000 元程度では採用が難しい現状もある。どうやって開発区の情報を得ることができたのか。開発区の情報はたまたま社員の中に延吉市の出身者がいて、そこから情報を得たとのことである。

その後、北本電気を訪問させていただき、超音波を使ったシンクを視察した。超音波を使って皿や食材を洗うことができる機械を開発していた。



◇所感

中国政府の支援体制について、遠くから通ってくる方が多い企業は、6 人部屋で、一人 100 元で住める寮を提供している。また、工場の取得費用（使用権）の半額を中国政府が持つことになっている。税金だけでなく、取得金額（中国の場合は使用権であるが）を負担するという積極的な姿勢は学ばなければならないと感じた。

◎延辺朝鮮族自治州人民代表大会常務委員会表敬（招宴）

新潟市議会と 2008 年「交流に関する覚書」を交わしている延辺朝鮮族自治州人民代表大会常務委員会を訪問した。

面談者は車光鉄氏（延辺州人民代表大会常務委員会主任）、林哲浩氏（同秘書長）、姜三童氏（民族僑務外事委員会副主任）、賈立新氏（民族僑務外事委員会弁公室主任）。

車主任からは、新潟市での北東アジア議長フォーラムで歓迎を受けたことに感謝の言葉をいただくとともに、これまで両地域で努力を続けてきた日本海横断航路について、現在は残念ながら停滞を余議なくされているが、いずれ状況が好転すると信じているとの発言をいただいた。

高橋議長は、「2008 年に友好交流に関する覚書を調印して以来、着実な友好交流関係を築いてきた。2009 年には延辺州人民代表大会の提案で第 1 回北東アジア議長フォーラムが実現し、今も継続開催されている。今後も、お互いに北東アジアの発展のため大いに力を発揮していきたい」と話し、篠田市長から預かった延辺朝鮮族自治州長あての親書を手渡した。

表敬は、延吉市のホテルにて延辺朝鮮族自治州人民代表大会常務委員会主催の招宴形式で開催され、和やかな雰囲気のもと 2008 年からのお互いの友情と信頼関係の深化を確認し合った。中国東北部は既に新潟の冬の寒さではあったが，心温まる歓迎をいただき感謝した。

平成 28 年 10 月 21 日（金）

◎延辺博物館視察

延辺博物館は、2012 年 9 月の延辺朝鮮族自治州創立 60 周年を記念してオープンした文化施設である。場所は、延吉市（中国吉林省）の市街地西部に位置する朝陽川空港の近くで、現在進められている大規模な新都市建設区域にある。館内には 12,000 件の文化財があり、その中で古代文化財が 5,700 件、渤海文化財が 1,200 件、近代文化財が 1,200 件、 民俗文化財が 2,800 件ある。 多くの文化財の中で、唐代渤海国時期の文化財が最も貴重で、朝鮮族の民俗文化と風情が注目される。

朝鮮族のこの地における歴史や文化・風習が様々に工夫されて展示されていて、吉林省東南部にあたる延辺地方の歴史を学ぶよい機会となった。ただ、ガイドによる案内されない場所があり、なぜその場所が案内されないのかの説明を求めても明確な回答が得られなかった。認識の違いを踏まえて交流は進めるべきと考えるが、認識のずれが未だ存在していると感じた。

≪総括≫

青島市、延辺朝鮮族自治州の議会（人民代表大会常務委員会）とは、友好的な関係を保ちながら議会同士の交流を継続してきた。その良好な関係の上に、青島市とは東アジア文化都市 2015 に選定された縁で文化交流の絆が構築され、市民間にも相互理解が深まってきている。今回の訪問では青島、延辺州の両人民代表大会から温かく迎えていただき、隣国において同じ立場、ともに地域発展のために活動している議会として意見交換できたことは大変有意義であったと実感している。

国家間では緊張した情勢が続いているだけに、このような地方議会の相互訪問は、歴史や政府間の摩擦を超えて、今後における経済交流、文化交流、市民交流にとって重要であると確信する。

今後、これまで築いてきた友好親善を土台として、新潟の食を通じた経済交流など実際の行動も必要な時期にきていると感じている。

最後に、関係各位のご協力に感謝を申し上げ、訪問の報告とさせていただく。